

新収資料紹介 マルガタクワガタ類

苧部治紀 (学芸員)

クワガタムシといえばノコギリクワガタに代表される「格好良いオオアゴ」が代名詞のような昆虫ですが、ここで紹介するマルガタクワガタ類は、一部の種を除けばオオアゴは貧弱ですし、丸っこいメス型の体型でそれほど魅力ある種とは思えないでしょう。ところが、実はこの一見つまらなそうな仲間が、クワガタを研究している人からは、もっとも注目されているグループの一つなのです。

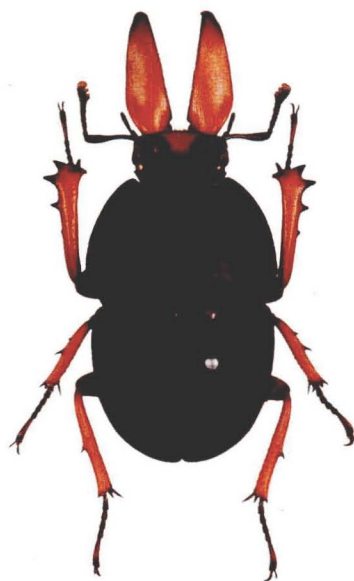
さて、このマルガタクワガタ類は、アフリカ南端に位置する南アフリカ共和国南部の山地からのみ知られています。そして、このあまり格好の良くない？仲間が注目を集めるのはやはりそれなりの訳があります。

第一に、彼らが後ろ翅が退化している「飛べないクワガタ」であることです。このため、移動はもっぱら歩行に頼るしかありません。ところが彼らが住んでいるのは、我々が思い浮かべる「普通の山」とは違って、平地からいきなり垂直に近い角度で立ち上がる、まるで豆腐のような形をしたテーブルマウンテンと呼ばれる山々なのです。翅のあるクワガタムシでは、このような地形の障害も簡単にではないにせよ飛び越えていくことが可能ですが、「飛べないクワガタ」である彼らは歩いて絶壁を降りることもできず、それぞれのテーブルマウンテンにとり残される(隔離される)形になり、お互いの交流は出来なくなりました。つまりこれらのテーブルマウンテンは、飛べない生物にとっては「陸地の中の島」のようなものだといえそうです。こうして長い間の地理的な隔離の結果、それぞれのテーブルマウンテンにおいて種分化が進行したと考えられ、この仲間は現在までに10数種が知られています。

第二に、生息地であるテーブルマウンテンへのアプローチは楽ではなく、一般の人が気楽に行ける場所ではありません。これまでに発見されてきた種の多くは地元の登山家が登山の際に偶然拾ってきたものがほとんどです。このため一般のクワガタ

と異なり採集される個体数も極めて少なく、なかなか手に入らない珍種としても著名でした。実際に日本に標本が入ってくるようになり、実物を拝めるようになったのは、せいぜいこの10年くらいの話で、それまでは写真や図を眺めてため息をつくのが精一杯だったのです。

さらにこの仲間の神秘性を高めているのが、その生態がほとんどなにもわかっていないということです。われわれの知っているクワガタムシのほとんどは、幼虫時代は倒木や立ち枯れなどの朽ち木を食べ、成虫はエサを求めて樹液に集まります。ところがマルガタクワガタの仲間の生息地は、テーブルマウンテンのなかでも高い木などない、岩だらけの荒涼とした荒地(草地)なのです。彼らは、おもに霧のかかる夕方に歩いていたり石の上に静止したりしているのが発見されているようですが、幼虫が草の根を食べていることが推測されている以外はいったい昼間どこにいて、交尾はいつどこで行うのか、成虫はなにを食べているのかあるいはなににも食べないのか(成虫はエサを与えてもなににも食べなかったという記録がありますし、実際生息



プリモスマルガタクワガタ。この仲間では唯一発達した唇のような形の大アゴを持ち、色彩も美しい。



ホワイトマルガタクワガタ(裏)。発達した前足と胸、小さな胴体に注目。

地にはクワガタのエサになりそうなものはなにもない)、などいまだ生活史の断片でさえほとんどわかっていないのが実情です。

さて、今回の資料ですが、この興味深いマルガタクワガタのうち、プリモスマルガタクワガタ、ネールマルガタクワガタ、ウェストウッドマルガタクワガタ、ホワイトマルガタクワガタの4種です。このうちプリモスマルガタクワガタはマルガタクワガタのなかでも特異なオオアゴと美しい色彩でもっとも人気が高い種類です。また、他の種でも歩き回るための適応と考えられる太く頑丈な前足とそこに生じた奇妙な突起など、ほかのクワガタには見られない特徴があります。

これらの資料は1F生命展示室の昆虫のコーナーで展示される予定です。

自然科学のとびら

第3巻第2号(通巻第9号)

1997年5月15日発行

発行所 神奈川県立生命の星・地球博物館

〒250 神奈川県小田原市入生田499番地

Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846

発行人 濱田隆士

編集 佐藤武宏・鈴木智明

印刷所 フルサワ印刷株式会社

自然環境保護のため再生紙を使用しています